



feature interview

# DJ TAIKI

7周年を迎えたHARLEMのオープンと共に毎週土曜日を賑わして来た“NO DOUBT”。そのレジデントDJとして今もなお前進を続け、自身のGeek名義のアルバム“Continuation”もリリースしたDJ TAIKIにインタビューを敢行！

■NO DOUBTの中でも時期によって色々流れがあったと思いますが、最近のNO DOUBTについて何か感じる事はありますか？

その時期に遊びに来る人達って、1年とか2年だったりとか、その時々しか来てないわけじゃん。多分、例えばヒップホップのクラブが好きで、ずっとそこで6年も7年も遊んでる人って意外と少ないと思うのね。1年半、2年くらい遊んだら、クラブ遊びをやめちゃうりする人達が沢山いて、その後また新しい人達が入ってきたりして。そういう風に回って行ってる感じがするんだけど、その1年、2年とかのスパンでかけ方とか、かかっているものとか煽り方の流行りってのがあって、MCで煽ってお祭り騒ぎみたいにして遊んでた時期もあれば「AV8」みたいなパーティーチューンの煽りものだけで持って行っていた時期もあったし、そういう色々なものを繰り返していくうちに、その時々でそのクラブの流行りというか、そういうものがハーレムの中では作られてきたのかなっていう…。

今の現状をDJの目線と言うと、ハーレムはその時期をもう色々な事を一通りやって来て、ちょっと成熟してる感じで、内容も密度も濃くなってるとDJの人達も長くやってる人が多いので、他のクラブに比べてドッシリしてる感じがするかな。それだけ安定感もあるし、内容も濃いものが出てくる気がするんだよね。例えば時によって若手の子達のパーティーが、若い子達のテンションで盛り上がってる事とかあったりするじゃん。それはそれで良いんだけど、NO DOUBTに関してはもうそういう時期じゃないと思う。元々昔からNO DOUBTって、そんなにMCとかで盛り上げたっていうのはなかったし、やっぱりクラブなんだから、DJがかける音を基本に遊んで欲しいっていうのを目指していたので、ホントにしっかりとした感じのものが出来てるんじゃないかなっていう気はしますけどね。

■ハーレムだからこそ出来る事、逆にハーレムだから出来ない事はありますか？

例えば、ハーレムのメインフロアだとDJの押し付けの選曲って出来ないのね。「俺はこうだからこれをやる」って事をすると、絶対お客さんがいなくなる。もう少し規模の小さいクラブだったり、平日とかだったら出来るのかも知れないけど、やっぱり週末は来てるお客さんを楽しませると言うのが第一で、DJが誰であろうと一番楽しませなきゃいけないのはお客さんだから、パーティーとしてちゃんとしたものを作る為には何をすれば良いのかっていう責任感と言うか、そういうのが凄い大事な事なかなっていう気がする。その中で自分達のやりたい事とか、この先こういう状況になって欲しいとか、こういう方向がもうちょっと盛り上がるようにしたいとか、そういうものは頭の中にあるって、それを少しずつ提供して、それが少しずつお客さんに馴染んでいって、選曲の幅が広がる様な事はもちろん作って行こうって、それは毎年毎年随時ある事で。奇抜な事や、突然ボンって何かやるって事は絶対に不可能な事だから。特に土曜日だし、ハーレムだし、変な言い方も知れないけど、ハーレムって一番東京の中でベシクじゃなきゃいけないと言うか、多分HARLEMが週末でおかしな事をしちゃって、東京のクラブシーンはもっとおかしな事になってくるような気がするんだよね。若い人達の中で挑戦的な事をやってる人もいるだろうし、それはそれで全然良いと思うんだけど、でもやっぱりNO DOUBTに関しては、いつ来ても楽しい、安定してる楽しさがあるってその中でこんな事やってるあんな事やってるっていう新しさもあり、色々なものをかけてるっていう提供もしつつ、耳が肥えてる人とかも実は毎週末来てたりもする訳だし、そういう人達も『オー』って言う様なものも提供しつつ、色々なクラブを渡り歩いてる人達も『やっぱりハーレム楽しいな』って思える様なもの。っていうのがやっぱり基本姿勢だよな。

■先日アルバムをリリースされて、普段その中の曲をかけた時も使われていますが、日本語を交えてかけるプレイに対する反応は？

悪くはないんだよな。何気に。俺が普通にクラブプレイで選んでかけてるものに関しては意外と悪くはなくて、そこで別にフロアは引きもしないし良いんだけど、ただ、やっぱり何曲か繋げていくと、やっぱり日本語的な部分で引いちゃう人もたまにいる。でもまあ『そういうのも音楽なんだから』っていうか、ヒップホップ

というカテゴリーの中で意識して、しかもクラブ向けに作った物に関しては、結構良い反応は返ってきてくれてるんじゃないかなって気はするけど。まだまだ戦いは続くって感じだよな。何なんだろうね。確かにライブって凄く盛り上がったりするじゃん。前も言ったけど、そのライブと、クラブの曲がやっぱり離れているんだよね。クラブに来てて、ライブに行かない人っていうのは何となく解る気がするんだけど、ライブに行くと、クラブに来ない人っていうのが、ちょっと不思議。ヒップホップって音楽が好きじゃないじゃなくて、アーティストのファンなのかな？例えば、ヒップホップが好きで、日本語の楽曲を聴いた時に、『お、この人達カッコいい』って思っただけでファンになりました。だったら解るのね。だからクラブにも来て、その日本人アーティストも好きっていうのは凄く解るんだ。

クラブでアメリカもののヒップホップを聴いていて、ヒップホップが好きで日本語のもの聴いて好きになりました、とかならまだしも、ヒップホップは聴かないっていうのって不思議だなんて。

結構多いんじゃないかなって思うんだよな。ライブに行くと会場のお客さんを見ると、何かクラブに来てるとはまた違う感じの人達がいっぱい居て、この人たちは普段どこでどうやって遊んでるんだろうとか、他にはどんな音楽を聴いているのだろうかなんて、凄く不思議になったりします。

■TAIKIさんとしてはそれはあまり健全ではない。

そのアーティストが好きで聴いてる人達はある意味健全だと思っ、それはそれで良いと思うんだけど。クラブって、もっとそういう人達の社交場っていうか、音楽好きの社交場っていうか。本来そういう所であって欲しいなって思う。ハーレムだってアーティストの人達来てると、音楽雑誌のライターさんとか編集部の人が来てたりとか、音楽関係の人もいっぱい来たりするわけじゃん。別にそういう人達じゃないけども、仕事は何をしていようが関係なくて、皆そういう音楽が好きなんだしたら、純粋にそういう所に来て、そういう人達と知り合って友達になったりするのがクラブだと思うし。そういう感覚でクラブにいると、多分きっと日本語だろうがアメリカもんだろうがあんまり関係ないでしょ。人それぞれ自分の個人の意見で言うと、同じヒップホップっていうルールの上で作ってるつもりではいるから、例えば自分がこれはクラブをターゲットにして作ったものだって思うものに関しては、かけていこうとは思っ、もちろん自分以外のもでもそういうアプローチのものが日本語で出来たらかかたいと思うし。前も何かの雑誌で言ったんだけど、日本人の作品って意外とそういうクラブ向けとか意識してるのかもしれないけど、実はかけられないものが凄く多いのね。かけたんだよ、かけたんだよ。やっぱり何の違和感もなくアメリカものと日本語のものがかかる環境で、フロアでも盛り上がるって言うのが理想なのかなって気がする。

■やはりクラブDJが楽曲を作って、アルバムを出したりする場合は、自然とフロアを意識しながら作る事が多いのでは、自然と？

アルバム単位になるとちょっと話は変わって来るんだけど、クラブDJが『これは俺がプレイ中にかけるんだ』って思っ作るものに関しては、やっぱりそういうアプローチの濃いものが出てくるんじゃないかなって思う。やっぱりレギュラーとかでずっとクラブでやってるDJの方が、そこら辺のセンスとか感覚を持ってるのかなって気はするかな。

あまりクラブにも遊びにも行きませんが、アメリカものもあまり聴きませんって人が作ると、その人の世界が出る独特のものは出来るかも知れないけど、じゃあ今の人の作品持ってヒップホップのクラブ行っかけてくれるって言われた時にかけられるものかどうかっていうのは微妙だったりすると思うんだ。クラブDJが作るものの方がその辺のセンスはね、きっと良いものが出てくるんじゃないかなって気はします。

■ver.3.0に提供している楽曲はクラブを意識して制作したのですか？

あれはもう100%ハーレムを意識して作ろうと思っ、ハーレムのメインフロアの鳴りを、それだけを意識してトラック作って渡したんだけど『相当派手な曲になりました』って感じ。

■出来上りは満足ですか？



うん、パツパツ。でもね、ハーレムを意識して作っただけで言ってるけど、あの曲は別にハーレムだけじゃなくて、どこに持って行っても派手だし、どこに出してもウケると思うんだよな。

あと、初めて歌と絡んだしね。今まで歌の人と絡んだ事なかったから面白かったよ。やっぱり凄くね歌の人達って。何か高級感が出るっていうか、リッチ感が出るっていうか。MUMMY-DとKOHEI JAPANだけでも凄く格好良いんだけど、やっぱり男らしいって言うか。ラッパーの中でもそんなに暑苦しくない2人だと思っんだけど、でもやっぱり男らしい感じになっちゃって、それはそれでFull Of Harmonyが入ってないバージョンも好きだったんだけど、入って、さらに好きになったかな。何だろうな、曲として入った感じになるっていうのかな。歌がハーモニーで入ってくると曲らしくなっていくんだよね。ラップってトラックがあってラップがあって無骨な感じっていうかさ、そのゴツゴツ感がカッコ良くてヒップホップっていう音楽が好きなんだけど、歌が入ることによって、それがまるやかになって、リッチになっていくっていうか、音楽になっていくって感じ。よくわかんないけど。あとは聴いてもらった人にジャッジしてもらっって事で。

■クラブDJ以外でプロデューサーのGEEKとして今後の予定は？

オファーがあればいくらでもプロデュースはやりたいて思っ。トラック制作もやって、クラブプレイもしかりしたものをやって、パーティーも良いものをどどん作りたいて。とりあえずプロデュースに関しては、ラッパーがどういふものを求めてくるかによって曲の雰囲気が変わってくると思うので、ある程度自分なりに対応出来るようにはしたいなって思っ。今回のHARLEM ver.3.0の“シブヤホリック”みたいな、ああいう本当にクラブ向け全開なものっていうのを自分の作品じゃないところでやりたいっていうのがあって、もちろん自分の作品なんだけど楽曲提供の部分で、実はクラブ向けなものだけ。オファーをもらっ時は、『クラブ向けのものをしか作らないから』とか『フロア向けな曲しか渡さないから』って言う。今年はもう自分のアルバム出しちゃったから、この後自分がプロデュースしたものもいくつか出るんだけど。人に楽曲提供するものに関しては、ほんとにクラブでガシガシかけられるものだけをターゲットに作って、自分の作品の時はまた違う事やっちゃうのかも知れないけど。やっぱり普段クラブでDJもしてるし、自分の作ったものを現場でもかかたいので、クラブ的なアプローチをしたものしか作りませんって風には今年も思っ。■アルバムを出す前と出した後で気持ち的な変化はありましたか？

うん、前はねCDとかの作品に関しては、音楽は音楽でカッコ良ければそれでいいじゃんって思っただけの部分もあったんだけど、やっぱりそのアルバムの個性の中で自分もクラブでDJしてるわけだし、何曲かはちゃんと現場でかけられるものを作ろうと思っ、もちろん

作っただけで、それをやって良かったなって。それが例えば、全部緩い感じのメロウなアルバムになっちゃったら、きっとクラブDJをやってもつまらなかったんだろうな、とか。『現場でかけられる曲が1曲も無いよ』っていうアルバムが出来たら凄くつまんなかったらと思う。だからアルバムの中にちゃんとガツガツ現場でかけられるものがあるって良かったな、出来て良かったなっていうのはあるかな。出し終わってからも、やっぱり自分がプロデュースするものに関しては、現場でかけられるものを定期的につけていきたい。やっぱり自分がプロデュースしたものをオンタイムでかけたいしね。

アメリカの人は最近いっぱい出して、日本人で出せる環境って少なくなって来てるから。CDもそんなに売れなくなってるし。やっぱりクラブで日本語ものがずっとかかかって欲しいっていうのもあるし。『そんなにこれ良くねーじゃん？』って曲もアメリカものとかで結構あったりして、でも何かそれが変に受けてたりするものもいっぱいあったりするし。『そういうのには負けないでしょ』みたいな。日本の意地っていうか。そういう部分もあっていいんじゃない？

■HARLEMの歴史と同じくNO DOUBTも8年目に突入する訳ですが、8年目に向けての目標と読者に一言。

もっとヒップホップが深いものと言うか、イベント自体の厚みみたいなものを作りたいよね。『すげえ、このイベント』みたいな。安定感もそうだし、いつ来ても絶対はずれないイベントであり、なおかつ、常連さんもちゃんと楽しませられる。それはやっぱり個々の積み重ねだと思うのね。自分がこれから、半年先、1年先にこういうものを皆に提供したいんだよって言うものを、すぐに提供してしまっ引かれちゃうけど、そこに対するアプローチって徐々にやっていくと絶対それは出来るようになるはずだから。今NO DOUBTのDJ達って、皆凄くしっかりしたDJだから、そういうビジョンはきっと何かしら持ってると思うし、例えばもうちょっとクラシックスだったり、ディスコっぽいものだったりとか、ソウルだったりとか、そういうものを入れていこうって思う人がいれば、それをガツガツ1時間とかやるんじゃないかってポイントポイントで、少しずつでもやっていこう。今もそういうのはやっているけどな。

NO DOUBTは絶対、方向性は間違っていないと思うから。俺は基本的にアメリカ人には負けたくないっや変だけど、日本語の楽曲なんかを自分が引かずとも普通に出して、それでお客さんが引かないようになれば成功だと思う。ま、でもパーティーだから、楽しませる事が第一ですよ。楽しんでもらう事が一番なので、やっぱりそのルールからは外れないように気を付けてやっていきたいとは思っ。■